

吉田光由翁 350 年遠忌

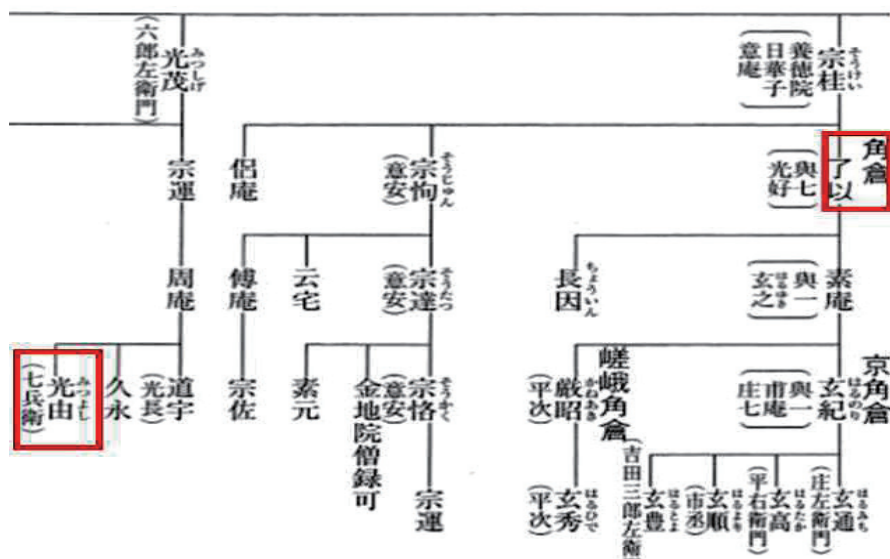
中井 保行

17 世紀の前半、角倉了以（1554 ～ 1614）に代表される吉田（角倉）一族は、海外貿易、河川疏通、土木工事、医術、和算をはじめ、多くの分野で活躍します。その一員である吉田光由は、和算書「塵劫記」を著しました。初版は、寛永 4 年（1627 年）のことでした。塵劫記のその後の活躍は、皆さんご存知の通りです。そして、今回は吉田光由の 350 年遠忌に関する報告です。

簡単に吉田光由の生涯を辿ってみましょう。

吉田光由は、関ヶ原の戦いの 2 年前の慶長 3 年（1598 年）に生まれ、徳川家綱の時代寛文 12 年（1672 年）11 月 21 日に没しました。晩年には失明していたとされます。75 歳でした。

吉田光由は、医者吉田周庵の子として京都嵯峨に生まれますが、ありありと彼の生涯を辿れるほどには詳しいことは分かっていません。系図は次のとおりです。



「角倉素庵」（林屋辰三郎）によれば、吉田（角倉）の一族は家族間で互いによく交流し、吉田光由もまた角倉了以やその子素庵に学問を教わったとされます。当時最盛期を迎えた角倉家の一員であったこと、中国からの算術書「算法統宗」が家にあったこと、角倉了以や素庵から直接教えを受けられたこと、和算の先駆けとなる毛利重能に塾生として教えてもらえたこと、書物を発刊できる実績や財力があったことなどが要因となり、寛永 4 年（1627 年）に和算実用書「塵劫記」の発刊に至ります。

その後、光由は兄の光長と菖蒲谷池と菖蒲谷隧道を完成させたり、肥後の細川家に招かれ九州へ出かけたりと伝わります。

しかしながら、晩年は故郷の嵯峨に帰ったのではないかと確信した嵯峨野在住の久下五十鈴氏の精力的な調査・検証により、小倉山二尊院の角倉墓地にあるひとつの墓石が目にとまり、吉田光由の墓石であろうことが判明します。この過程で大きな謎となったひ

とつは、二尊院の過去帳には吉田光由の記述があるのに、二尊院に墓石がないということでした。このようなこともあり、350年遠忌の機会に位牌を新調したいというのが、我々特に久下氏の願いでした。果たして、久下氏の願いは叶い、二尊院に新調位牌が奉納されました。



写真1 吉田光由の墓石（二尊）

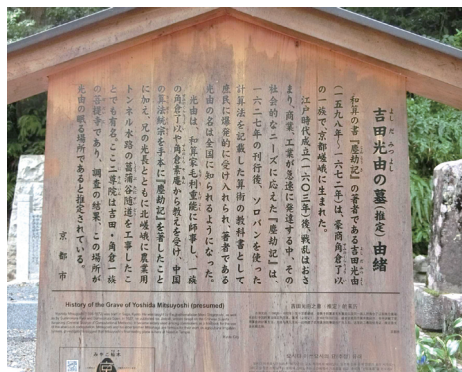


写真2 駒札（二尊院）



写真3 吉田光由の位牌（新調）



写真4 記念写真（二尊院角倉墓地にて）